

令和3年度 第2回富山県農政審議会の概要

1 日 時 令和3年11月25日(木) 10:00~11:40

2 場 所 富山県民会館611号室

3 出席者 委員19名、代理出席2名(委員数24名)

4 あいさつ(横田副知事)

富山県の農業の現状と将来を見据えた時に、一番の課題は農業の担う人材、地域を支える人材を確保し、育成していくことだと思う。今後を見据えると、なるべく多くの新規就農者や、他の仕事を合わせて農業を行う半農・半X人材を含め、多様な人材を確保していき、地域農業を成り立たせていく点が重要ではないかと思う。そのためには、地域での受け入れ態勢が必要と考える。

また、高品質な米を生産・販売してだけでなく、米以外の品目、園芸作物や畜産物といった需要の高いものの生産をどう拡大していくかが、重要ではないか。

本日は、これまでの議論を踏まえるとともに、メインの論点となる考え方をお示しし、計画の骨子案も提示するので、議論・ご提案いただきたい。

5 議 事

(1) 審議事項

新たな「富山県農業・農村振興計画」の策定について

6 審議事項①についての委員の主な意見

【鍋嶋委員】(※HPでは名前を削除)

- ・農地集積目標の90%は高すぎると思っていたので、80%になったことは妥当だと思う。
- ・暗渠排水整備はスピード感をもってやってもらいたい。県内では水田の排水路は大体開渠で、落ちてケガすることもあり、暗渠なり管渠にすれば、草刈り等の農作業が楽になる。
→ 現行計画では、目標指標の水田汎用化面積に老朽化農地の水漏れ修繕した面積もカウントしていたが、暗渠排水に限ったほうが、目標指標としては分かりやすいということで変更した。排水路の暗渠化については、県内でも例があるが、地形勾配がある程度ないと、管路の中に土砂がたまりやすいこともあるので、地形条件も加味しながら、できるところは進めていきたい。
- ・いわゆる米余りの時代なので、当然価格も下がってくる。日本人が米を食べなくなって、代わりに小麦を食べるようになったのであれば、小麦の品種改良なり研究が必要ではないか。
→ 小麦は、梅雨と収穫時期が重なることで、なかなか研究が進んでいなかったが、新しい品種も国

のほうでは開発されており、県内でも、高岡市や砺波市で作付けされていることから、情報収集から取りかかりたいと考えている。

【青木委員】

- ・米の概算金が下がったことで、富山県内の市町村でも支援が出ているところがあるが、県ではどうなっているのか。
→ 米価下落については、国のナラシ対策や収入保険制度があるが、来年6月頃の入金となることで、資金繰り対策が必要になってくる。日本政策金融公庫では、セーフティネット資金を無利子融資で運用、JAについても、つなぎ融資等の無利子の制度等もできているので、活用してほしい。
- ・とやまGAPの推進による持続性の高い農業や高品質な農産物の生産拡大は分かるが、認証GAPを維持していくのは大変で、やめられた農家が結構ある。県として支援をお願いしたい。
→ 認証に当たっての審査に対してのフォローについては、今後も農林振興センターなどと連携して実施したいと考えている。

【石田委員】

- ・最近、あぜ草などの雑草処理について、手が回らなくなってきているので、雑草が目立つ農村景観となっている。農地を預かっている担い手の負担だけで賄うのもそろそろ限界がある。
福祉関係の事務所から、あぜ草刈りの仕事のための練習をするために圃場を貸してほしいという話があり、そういう人材の活用に対しての支援があれば、事業所の仕事の確保にもなり、農地を管理していく経営体にとっても助かるのでは。
→ 農福連携については、令和2年度から推進会議を設けて推進を図っているところ。今年度については、7つの農業経営体で試行的に実施するチャレンジ支援事業を進めているところである。

【島澤委員】

- ・県内にどれぐらいの飼料用米が必要とされている畜産農家がいる、それに見合った生産力が富山県内にあるのかどうかは全く見えていないので、具体的に示してほしい。
- ・半農半Xについて、女性が経営参画しやすい農業経営体というのは、農業経営のほかには何かXのようなものがあればいいと思っている。女性ができるXの部分を具体的に示すことができればよい。
- ・GAPを取ることに伴うメリットが全く書かれていない。GAPを取ったことによって有利販売ができるようにすることについても記載してほしい。
→ GAPについては安全な農産物を作るという部分、環境に配慮したという部分、それと作業者、

人に優しいという部分があり、経営体内部においては、人に優しい部分がメリットとしてはあると思う。一般消費者にはまだ認知度が足りない、付加価値がまだ浸透していない等の御意見もあり、今後一層、取組についてのPRが必要だという認識もしている。

【田悟委員】

- ・最近、女性の役員登用ということをよく言われる。自分たちで力をつけて立つようにしてからでないと、なかなか役員登用という話になっていかない。特に、個人経営だったら経営の中の参画とか、営農組合だったら役員になって力をつけるとかというところから始まって、各個人それぞれが、自分で自分の日常を磨きながら経営に参加するところもあっていいのではないかな。
- ・富富富を使った笹ずしが、すごく好評なので、道の駅やAコープで販売している。おいしいという富富富の特徴を上手にPRして、富富富の普及活動をすれば、もっと伸びるんじゃないかなと思う。

【稗苗（史）委員】

- ・今、農村に不足しているのは、様々な事業を提案して実行できる人材と組織だと思っている。新たな時代を見据えた自治機能の強化、近年の豪雨や豪雪の自然災害に対する防災機能の強化、マイクロ発電などの自然エネルギー開発への参入など、新しい形でのコミティー活動が必要でないか。

近年、国のほうでも農村RMOに関する事業を強化する方針であるが、まさしくこれからの農村振興は、農村RMOが鍵になってくると確信している。第5期の中山間直払により追加された集落機能加算は、令和4年度より農村RMOの支援が加算になっている。中山間直払が生産部門だけでなく、自治機能まで加算対象にしたということは、重く受け止めなくてはいけないと思っており、新たな県の農業・農村振興計画案では、農村RMOについての記載がないが、ぜひとも追加してほしい。国の農村RMO事業と連携しながら、県独自に支援策を考えてほしい。元気で魅力ある農村、誇りの持てる農村をつくっていききたいと思っているので、支援をお願いしたい。

→農村RMOについては、自治組織が機能しないと、都会からの人の受入れとか農業の担い手の方々の連携などの活動ができないということで、まずは中山間地域の協定組織とか農業生産組織、あとは福祉組織とか、消防団など、その地域にある各組織が連携して、いろんな取組が復活できるような体制づくりを国が支援している。RMOという言葉は使っていないが、そういった精神をこの計画の中に盛り込んでいきたいと考えている。

【森下委員】

- ・地元の農業科の高校生を研修で入れているが、農業をしたい気持ちの子がすごく少なく、もう少し授業の中でも意欲を高められるように現役の農業者を講師にするなどして、農業に興味を持たせ

るような方向に持って行ってもらいたい。

- ・規模拡大をする中で大型機械の導入が増えてきて、スマート農業、農機がいろいろ出ているが、スマート農業化するところはまだまだ少ない。その中で、高齢者も多いので事故がすごく多発おり、農業者の方々への安全運転の指導にも力を入れてもらいたい。
- ・今年、イノシシとか熊とかの鳥獣被害は少なかったが、山あい、中山間地のほうでは被害を受けている農家もまだまだいる。猟友会も高齢化してきている中で、若い人がなかなか入ってこないこともあるので、被害から守るためにも、猟友会への支援をしてほしい。

【米島委員】

- ・今、基盤整備している地区では、作土が20センチ以上あるが、約50年前の基盤整備では、作土10センチぐらいのところは石がたくさんある。野菜を作ろうと思ったら、石を拾わないとできなくて、大変な労力がかかる。県で石を拾う機械を導入し、貸すような仕組みにして、野菜を作れるような地面にしないといけない。

【伊藤委員】

- ・論点は、まさにここに書いてあるとおり。特に2つ目の米に偏らない農業生産はやっていかざるを得ない。残念ながら、人間の食べる米は、毎年トレンドで10万トン減っている。それらを見据えて、今後、富山県農業は何を作るんだという方向性を明示する時期に来ているんじゃないかなという感じがする。

資料3にいろいろな指標が出ているが、これから生産コストを下げるのに直播をやる必要があるところで、水稻の直播の指標を廃止という、やめたのかというイメージになりかねない。

→ 直播栽培につきましては、省力、低コスト化や作期分散が図られることで、県内でも取り組まれている。近年、低コスト化を図るために、高密度播種栽培、いわゆる密苗も普及してきている。そういう取組をやめることではなくて、低コストの取組については、スマート農機や新技術を導入した取組などにより生産性を高めていくよう進めていきたいと考えている。

- ・主食用米を作れない、園芸振興をしようというときに、1億円産地づくりの指標を廃止することは、赤信号、取組みを止めるような感じがする、この廃止という言葉の真意をお聞きしたい。
- 園芸の生産拡大を図るために、平成22年度から、各農協に戦略品目を定めて生産拡大を図ってきており、機械化ができていく品目を中心に生産拡大も図られてきている。今後は、1億円産地づくりの品目に限らず園芸の生産拡大を図っていくということで、園芸の産出額全体としての目標指標としたいと考えている。

【谷井委員】

- ・美しい農村と表現されているが、最近いろんなところで耕作放棄地がすごく見受けられ、美しい農村からかけ離れていく気がする。
- ・今年みたいに梨が少なかったとか、異常気象で大災害も起きるのではないか。それで、今年みたいに農家の方が苦しまないで済むように、品種改良などをして、時期を遅らせて取れるような方法はないかなど検討してほしい。

【永森委員】

- ・地域を支える兼業農家や半農半Xというのは、農業を支えるのか農村を支えるのかという視点で、担い手の定義についても、農業を支える担い手と農村を担う担い手があり、わかりづらくなっている。

【安井委員】

- ・青果市場とすれば、特に園芸にもっと注力していただきたいが、作るだけが農業ではなくて、しっかりとした販路に基づいて、食品として魅力のあるものに仕上げるところまでが農業だと思う。
いろいろな形の流通の経路が出てきているが、ただ作るのではなくて、どう売するのか、どうもうけさせていけるのかというところまでしっかりと考えた施策が必要。
- ・人材の確保の観点からいっても、経営、ビジネスとして成り立つものにしていかないと、若い人が農業に入っていない。そのために、もうかる農業という観点をしっかりと組み立てていかなければならない。
- ・ここ数年、やっとなり波のタマネギも品質がよくなってきたが、始めの2、3年は品質でかなり苦労されている。富山県産のニンジンも、返品だらけの状況で、2日もたつと肌艶が黒くなる。田んぼで野菜を作れと言うのは簡単だが、米のプロが野菜を作ることから、商品としてしっかりとしたものが栽培できる方法について考えていただきたい。

【尾畑委員】

- ・今回この資料は大変よくまとまっていて、理解するのにすごくよい。
- ・小さな事象とかエシカル消費とかSDGsとか、消費者としてみんなに普及するように努力しているが、地産地消というところ、消費者は買いたいという意欲があるのに対し、GAPというのなかなか理解できないところがあるので、消費者にも分かりやすくしてほしい。
- ・人材については、人口が減ってきている中で、農業高校に行かない時代になっている。これからの農

業に若い高校生が勧めるような、本当に夢が持てるようなことをぜひお願いしたい。

人材は二層化していて、もうけるだけじゃなくて、自己実現したいという経営者も、他県ではたくさんいると聞いているので、農業未来カレッジとつなぐとか、高等教育とつなぐような形の進め方を他部局と連携してやっていただきたい。

【川合委員】

- ・食品関係の加工では、グルテンフリーということで、米粉パン、米粉を求めている方は増えているので、食品加工の技術的なものを、県や加工業者、そして農業者の皆さんと一緒に組んで、まだまだ研究する余地があると思う。ブランドをつくっていく上で、お米は富山のテーマであるので、新しいことをやろうといろいろ考えている。

【大西委員】

- ・県内どこを見渡しても、過疎化、少子高齢化が進み耕作放棄地が多い、農村というものは農業を軸とした年中行事とか、独特なコミュニティとか、特有の食文化とか、そういう内面的なものも含めて、農村としての美しさというものが存在しているのではないかと思う。

ただし、こういうものにずっとこだわっているのは、今後新しい農村の形は生まれてこないもので、農村RMOなど、持続可能な農村を続けていくことも考えていかなければと思う。担当課の垣根を越えて横断的に取り組んで、ぜひチーム富山で取り組んでいただきたい。

- ・人材の確保については、自由な発想を持っている子供たち、これから農業に興味がある子たちもたくさんいると思う。農業科を選ばなくても、今後、自分が別な分野で就職しても、興味がある子供たちもいるかもしれないので、少しでも興味があったり、関わりたいなと思っている人のマッチングは非常に重要になってくるかと思う。富山の農村は堅いというか、門戸を開いているとはちょっと言いにくいので、そういうところにも配慮いただきたい。

【松澤委員】

- ・加工品をつくっている方が多いが、自分が作りやすいとか、自分がやりやすいという視点を重視されている。対面では販売につながるが、競合が多くて埋もれていくということも目にしている。マーケットインに基づく生産振興とあったかと思うが、農産品そのものだけではなくて、加工品や6次産業化という部分についても考える必要があるのではないかと思う。セミナーなども開催していると思うが、その中でもマーケットの情報を入れて伝えていく必要がある。
- ・女性や若者を取り込むという意味では、モデルケースを具体的に示して、ライフスタイルや、こういう生活に憧れるというものを富山県主体で発信することも必要かと思う。

【寺井委員】

- ・数値で示せるものは数値で示す努力をしているが、方向性を示すだけでは計画として十分とはいえない。これから県の予算編成も始まるので、国の予算を活用しながら、ぜひ農業者の皆さんがやる気が出てくるように、支援策に知恵を絞っていただきたいと思う。例えば、県独自で、これまでも1億円産地づくりとか、国の予算も活用しながらいろいろと実施してきたので、新しい課題にも対応できるように、支援策をぜひ考えていただきたい。

【稗苗（智）委員】

- ・18歳人口が減ってきている中で、農業系や福祉系を希望する高校生が今とても少ない現状。農福連携の一つとして、高齢者もあるという話であったが、人生100年時代といったときに、高齢者の方に、いかにして農業に何か興味を持ってもらって、新たにそこで学びをしたいというチャンスを示しながら、どんどん人を巻き込んでいくような新たな発想も必要ではないか。

【田中委員代理（前山）】

- ・南砺市では、米を中心とした認定新規就農者は1名だけで、ほとんど有機農業または果樹、特に干し柿とかブドウを作る人が多くなっている。米農家を辞める人が非常に多くて、農地集積はどんどん集まってくるが、担い手のほうでは、もうこれ以上受けられない状態になっている。
- ・もみ殻とか果樹の剪定枝、アスパラガスについて、燃やしてはいけないと関係当局から言われており、農家の人からどうすればいいか問合せが来ている。いろんな市町村に聞いているが、なかなか対応策が見つけられないということで、県からも指導していただきたい。

【笹島委員代理（長島）】

- ・担い手の皆さんはボランティアではなく、生業としてやっているので、その経営基盤の強化がまず大前提だと考えている。県の指導等をいただきながら、町として担い手の経営基盤の強化に取り組みたい。

【酒井会長】

- ・今お示しいただいた計画案の方向は、基本的には良い。印象に残ったのは、もう変えなきゃいかんという方向性で、その方向性をしっかり明示したのが今回の計画ではないかと思う。

【横田副知事】

- ・農業・農村振興計画、メッセージ性があるもの、関係の皆さんがこれからこういう方向でやっていこうという気持ちになるようなものをつくっていかねばいけないことを改めて感じた。非常に難しい問題だとか、あるいは時間のかかる問題もあると思うが、関係者、それから地域の皆さんと一緒に、同じ目標を持って進めていくことが必要になってくるかと思う。農業は、人の問題だけを考えても大変な危機にあるかと思うので、食料を支えること、地域を支えること、農業を維持し、活性化していくことをぜひ皆さんと進めていきたいと思う。